

2013.10.29

「瀬戸内町の戦争遺跡について」現地調査 報告書

正 智子

講師 前迫 亮一先生（県教育庁文化財課）

日時 2013年10月26日（土）

参加者 前迫亮一， 鼎丈太郎， 正智子， 秀平かおり， 朝修一

目的

瀬戸内町では明治から昭和にかけて数多くの戦争遺跡が構築された。今回は、主に加計呂麻島の戦争遺跡の現状を把握するため調査を実施した。戦争関連の施設は、その性質上、時代の流れに連動し、役割や構築技法が変化していく。今回はその変化を確認するとともに、戦争遺跡の現状についても調査を行った。

調査成果

・三浦（海軍艦船用給水ダム跡、石垣の用水路）

…艦船用給水ダムは、昭和12~13年ごろ工事が始まったとされる。現在でも満々と水をたたえ、堅牢な造りである。しかし、石垣の用水路の一部で、植物の浸食により石垣が崩れている場所を確認した。

・瀬相（海軍防備隊所跡、海軍司令部跡）

…昭和16年瀬相に海軍大島根拠地隊が編成され、昭和17年には大島防備隊となる。昭和19年以来米軍の空襲に対し戦果を挙げ、沖縄補給及び離島輸送の中継基地としての重要な任務を果たした地である。現在では、草が生い茂り一部以外は確認が困難である。

・呑之浦（第18震洋艇基地跡、島尾敏雄文学碑）

…昭和19年（1944年）に複雑な海岸線を利用して築かれた。コンクリート使用箇所は出入口のみで、格納壕・奥は手掘りで構築されたようである。壕内は、落盤も起きており、安全面も含め、今後の対策を検討する必要がある。

・安脚場（兵舎跡、弾薬庫、砲台跡、探照灯跡、天水貯水池跡）

…陸軍安脚場砲台は、大正10年に着工。海軍防備衛所は、昭和15年着工。兵舎跡地にある海軍烹炊所と中腹にある弾薬庫が、類似した造りであることを確認した。大正時代に構築された施設の造りは、後から上塗りされた化粧壁が確認できた。昭和16年に構築された防備衛所は、骨組の一部に木が代用されている。大正時代に作られたコンクリート造りの建造物と比較すると、粗悪な造りのためコンクリートが崩れてきている部分も確認できる。

今回の調査で、構築された年代の戦況の変化と、施設の役割や構築等が連動し、変化していることが確認できた。

対策

戦争遺跡全体を、保全・整備することができれば、観光や学習の場などでの活用が十分に可能である。崩壊部分は、安全面も考慮し早急に現状を保存する必要があると感じた。



旧海軍大島防備隊所跡（遠景）



旧海軍大島防備隊



旧海軍司令室出入口門跡



旧海軍司令室内



旧海軍艦船給水ダム（三浦）



旧海軍艦船給水ダム（三浦）



石垣の用水路



木々の浸食で壊れる石垣



震洋艇格納壕入口（呑之浦）



震洋艇



震洋艇格納壕内



衛舎内海軍炊炊所・浴室・医務室



陸軍砲台監守衛舎



弾薬庫周辺壁



貯水槽



沓戸過池



弾薬庫



弾薬庫



用途不明



大島海峡東口



海軍防備衛舎



海軍防備衛舎



鉄骨の代用で“木”を使用



旧海軍防備衛舎

2013.10.29

「瀬戸内町の戦争遺跡について」講座 報告書

正 智子

講 師 前迫 亮一先生（県教育庁文化財課）
日 時 2013年10月27日（日）
参加者 大人38名

目的

鹿児島県内で前迫先生が発掘調査された戦争関連資料（幕末～明治維新～アジア太平洋戦争）の中から県本土で発生した戦争事例に触れ、「県本土から見た瀬戸内町の戦争遺跡」という視点から、本町の戦争遺跡には、どのような役割があったのかを考えていく。また、大正から昭和にかけて造られた町内に残る戦争遺跡や遺跡の現状を学び、戦争遺跡を残すことの意味や重要性について理解を深める。

講座内容

- ・発掘された鹿児島の戦争遺跡関連資料～瀬戸内町の戦争遺跡は何を語るか～
- ・発掘された戦争関連資料
（第Ⅰ期（幕末～明治初年）①薩英戦争 ②西南戦争）
（第Ⅱ期（昭和初年～アジア太平洋戦争終結）①前半期 ②後半期）
- ・瀬戸内町の戦争関連遺跡
- ・戦争遺跡をどうとらえるか
- ・今後の展望と課題



講座風景